公益社団法人
日本語教育学会
Association for Japanese Language Education

2024 年度第 4回支部集会【関西支部】

主催：公益社団法人 日本語教育学会
後援：追手門学院大学

日時：2025年 3 月 15日（土）10:00～16：50（受付開始 09：30）

会場：追手門学院大学・茨木総持寺キャンパス内アカデミックアーク（Ⅰ期棟）

（〒567-0013　大阪府茨木市太田東芝町1番1号）

交通アクセス：JR総持寺駅より徒歩15分

阪急茨木市駅から近鉄バスがキャンパス前まで運行しております。（乗車時間約16分）

【行き】阪急茨木市駅　→　追大総持寺キャンパス前（花園・東和苑行き）

【帰り】追大総持寺キャンパス前　→　阪急茨木市駅

https://www.otemon.ac.jp/guide/campus/access.html

※公共交通機関を利用してご来場ください。

※当日，学内の食堂・コンビニエンスストアの営業はありません。大学向かいのイオンタウン茨木太田をご利用ください。昼食会場として，A432教室もご利用いただけます。

参加費：500 円（マイページより事前参加登録時に支払い）　　定員：150名

対象：日本語教育に関心のある方ならどなたでもご参加いただけます。

申込締切：2025年 3 月 7 日（金）23：59（定員に達した場合は，締切日以前に締め切ります）

申込方法：本イベントへのご参加には事前登録が必要です。日本語教育学会会員以外の方もお気軽にご参加ください。日本語教育学会マイページ から事前参加登録をお願いします。

問合先：公益社団法人日本語教育学会 支部活動委員会

E-mail：shibu@nkg.or.jp　TEL：03-3262-4291（平日 9～18 時のみ）

◆支部集会日程◆

09:30	受付開始　【A433教室】
10：00-10：05	開会のごあいさつ　【A441教室】
10：15-10：45	口頭発表1【A会場：A441教室　B会場：A442教室　C会場A443教室】
10：55-11：25	口頭発表2【A会場：A441教室　B会場：A442教室　C会場A443教室】
11：35-12：05	口頭発表3　【A会場：A441教室】
13：20-14：50	ポスター発表7件　【A331教室】
15：10-16：40	パネルセッション 「枠校の取り組みと課題」　【A341教室】
16：40-16：50	閉会のごあいさつ　【A341教室】

公益社団法人
日本語教育学会
Association for Japanese Language Education

開会 【A441教室】

口頭発表

※本発表は査読審査を経た学会発表です。発表要旨は本プログラム p.4～，詳細は予稿集原稿をご覧ください。

A会場 10:15-12:05（司会：木下 謙朗（龍谷大学））A441教室

A-1 10:15-

「初級非漢字系日本語学習者にみられる漢字の書き誤り－形態・読み・意味の包括的分析－」 三枝桜花（拓殖大学大学院生）

A-2 10:55-

「日本語学習経験がベトナム語母語話者の漢越語意味把握に与える影響に関する質的研究」 天野裕子（沖縄大学），道上史絵（立命館大学），比留間洋一（静岡大学）

A-3 11:35-

「友人間LINEチャットにおけるデスマス形へのスタイルシフト」 岡崎渉（鳴門教育大学）

B会場 10:15-11:25（司会：内田さつき（コミュニカ学院））A442教室

B-1 10:15-

「キャリア支援の授業における日本語教師の役割と課題」 渡部裕子（東洋大学）

B-2 10:55-

「ストーリーテリングタスクにおける日本語学習者の発話の流暢さの発達－北京日本語学習者縦断コーパスをもとに－」 曾子芸（広島大学）

C会場 10:15-11:25（司会：亀田美保(大阪YMCA)）A443教室

C-1 10:15-

「外国につながる就学前児童への日本語音声指導」 杉山美樹子（静岡文化芸術大学大学院生）

C-2 10:55-

「住民関係を構築する日本語教室の試み－神奈川県N団地の事例から－」 片山奈緒美（東洋大学）

ポスター発表 13:20-14:50 【A331教室】

※本発表は査読審査を経た学会発表です。発表要旨は本プログラム p.7～，詳細は予稿集原稿をご覧ください。

① 「言語ヒストリー研究は，セルフスタディと言えるのか－日本語教師による日本語教師研究と日本語教師教育者の専門性開発のために－」 小林浩明（北九州市立大学），上田和子（武庫川女子大学），和泉元千春（奈良教育大学），野畑理佳（武庫川女子大学）

② 「日本語学習者の聴解過程における聴解ストラテジーの使用」 阪上彩子（奈良教育大学）

③ 「大学で教える日本語教師を対象とした研修事例 －教師の学びを促進する共同体を目指して－」 谷津裕子（東京国際大学），齋藤和恵（東京国際大学）

④「地域日本語教室の引き継ぎと継続を可能とする行政職員の意識－インタビュー調査に基づく事例研究－」 深田絵里（愛媛大学），髙橋志野（愛媛大学）

⑤「物語を読解後にマンガを描く授業実践－読みによる理解を非言語で表現する意義に着目して－」 嶋田由唯（立命館大学大学院生）

⑥「日本語を共通語とした説明活動が日本語学習者と日本人学生に与える影響」
伊藤賀与子（広島修道大学）

⑦「タスク遂行時におけるプランニングの種類が言語への焦点化に及ぼす影響－ジグソータスクを題材として－」 大野芽生（広島大学大学院生）

パネルセッション　15:10-16:40　【A341教室】

「枠校の取り組みと課題」

開催趣旨

大阪府にはいわゆる「枠校」と呼ばれる，日本語指導が必要な生徒・帰国者に対する特別入試選抜を行う高校がある。在日外国人の人口の増加に伴い，日本語指導が必要な生徒も増加する中，枠校ではどのような取り組みが行われ，またどのような課題があるのか。枠校ならではの日本語教育について知ると同時に，今後現場ではどのような人材が求められるのか，日本語教員養成への期待などについてディスカッションを行う。

司会　藪崎淳子(追手門学院大学)

パネリスト　甲田　菜津美氏（大阪府立大阪わかば高校）
酒井　清夏氏(大阪府立東淀川高校)
岸本　裕美氏(大阪府立福井高校)

閉会　【A341教室】

〔2024 年度第 4 回支部集会（関西支部）口頭発表 A-1〕

初級非漢字系日本語学習者にみられる漢字の書き誤り

―形態・読み・意味の包括的分析―

三枝　桜花

本研究は，初級非漢字系学習者の漢字の書き誤りにおける「形態・読み・意味」の関係性を明らかにし，指導への示唆を得ることを目的とする。日本語学校で 2024 年 4 月から 8 月にかけて行われた計 11 回の漢字テストで書き問題として出題された 124 字（のべ 130 字）の書き誤りを分析した。分析にあたり，原因を 20 項目に細分化し，さらにそれらを，一点一画に起因する「線レベル」，線の脱落などの「部品レベル」，類似している漢字を使用した「別字レベル」の 3 階層に分けた。結果，「線レベル」が原因の誤りが最も多く，正答率が低下すると，さらにその割合が高くなることが分かった。また「部品レベル」は正答率に関わらず，ほぼ一定の割合だった。さらに書き誤りの要因は「線レベル」のハネの脱落が最も多かった。これらの結果から，初級非漢字系学習者への指導では，「線レベル」の指導を重視して行うことが，書き誤りの減少に効果的であると言える。

（三枝―拓殖大学大学院生）

〔2024 年度第 4 回支部集会（関西支部）口頭発表 A-2〕

日本語学習経験がベトナム語母語話者の漢越語意味把握に与える影響に関する質的研究

天野裕子・道上史絵・比留間洋一

現代ベトナム語では漢字が使用されていないが，漢語由来の漢越語が多く存在する。この知識を日本語学習に活用するためには，ベトナム語を母語とする日本語学習者が漢越語の意味を日本語と同義で把握していることが前提となるが，その実態調査が不十分である。本発表は，日本語学習者の漢越語の意味把握状況を明らかにしようとしたものである。日本語学習歴のないベトナム人大学生 28 名と日本語学習歴のあるベトナム人留学生 2 名に対し漢越語の意味を尋ねる質問紙調査を行い，二者の回答のうち違いが見られる語を取り出して日本語学習歴のある 2 名に回答した理由を尋ねた。結果として，日本語学習を通じて漢越語の知識が増加していること，日本語学習を通じて知らなかった漢越語の知識を獲得していること，漢字知識を活用した意味推測が行われるが，既存の知識との混在が見られる場合もあることが明らかになった。

（天野―沖縄大学，道上―立命館大学，比留間―静岡大学）

〔2024 年度第 4 回支部集会（関西支部）口頭発表 A-3〕

友人間 LINE チャットにおけるデスマス形へのスタイルシフト

岡崎　渉

本研究の目的は，友人間 LINE チャットにおけるスタイル（デスマス形・非デスマス形）の運用実態を明らかにすることである。データに用いたのは，同年代友人同士の 13 ペアによる，1 年間で実際にやりとりされた LINE チャットであり，総発話文数は 24,541 であった。すべての話者が非デスマス形を基調スタイルとしつつもデスマス形も混用させており，その平均使用率は一話者あたり 7.2%であった。話者間では多少差があるものの，デスマス形の使用率はペア内では互いに近似しており，デスマス形は相手のデスマス形使用に呼応して用いられる傾向のあることがわかった。また，デスマス形は依頼，誘い，許可求め，感謝，謝罪，報告といった発話で用いられていた。この場合のデスマス形は相手への配慮や改まりの表示と理解できるが，過剰に丁寧な形式やエセ方言などが用いられることで，冗談としても理解できる発話となっている場合も多く見られた。

（岡崎―鳴門教育大学）

〔2024 年度第 4 回支部集会（関西支部）口頭発表 B-1〕

キャリア支援の授業における日本語教師の役割と課題

渡部裕子

本研究では就労のための日本語学習者へのキャリア支援に焦点を当て,効果的な教育実践と教師育成の示唆を得るために,日本語教師によるキャリアプランニング(以下 CP)授業の課題を明らかにすることを目的とし,28 授業の非参与観察を行った。その結果，到達目標への達成度が不十分と判断された要因に、①CP を日本語教師が担当する意義に対する理解不足、②CP プロセスの各ステップの目的・目標に対する理解不足、③CP の内容と日本語の同時学習が組み立てられない、という 3 つの課題が見られた。特に③は日本語教師が担当する強みが活かせるところであり、キャリアの専門家との役割の違いや位置づけを明確にし、日本語教師が担当する意義の認識を促す必要性が示唆された。

効果的な CP の授業実践のためには、日本語教師の役割をキャリアの専門家につなげるための仲介的教育人材と位置づけ、その強みを活かすために、CP の各ステップの目的や到達目標の明示した上で日本語学習を並行する授業展開例を検討する必要があると考える。

（渡部―東洋大学）

〔2024 年度第 4 回支部集会（関西支部）口頭発表 B-2〕

ストーリーテリングタスクにおける日本語学習者の発話の流暢さの発達

―北京日本語学習者縦断コーパスをもとに―

曽　子芸

本研究は，2023 年に公開された北京日本語学習者縦断コーパス（B-JAS）のデータに基づいて，17 名の日本語学習者の 4 年間のストーリーテリングタスクにおける発話の 1 ポーズあたりのポーズ時間を計算して，学習者の発話の流暢さがどのように変化していくのかを明らかにしようとした。また，４年間にわたって，日本語学習者の発話の流暢さの成長率の変化についても考察した。分析ソフト HAD による多重比較の結果，1 年次と 2，3，4 年次の間に，流暢さの平均値の差に有意差が見られたのに対して，２年次と３年次，２年次と４年次，３年次と 4 年次の間には，流暢さの平均値の差に有意差が見られなかった。以上より，4 年間にわたり，日本語を専攻する学習者の発話の流暢さ（1 ポーズあたりのポーズ時間）は，２年目に著しく進歩がみられたが，それ以降は成長が停滞しているように見える。このことから，２年目以降学習者の流暢さの成長はプラトー期に陥ったと考えられる。

（曽―広島大学）

〔2024 年度第 4 回支部集会（関西支部）口頭発表 C-1〕

外国につながる就学前児童への日本語の音声指導

杉山美樹子

外国につながる子どもたちが日本の保育機関から日本の小学校へ就学後、日本語の読み書き能力が低いことが課題として挙げられる。重要な点は、就学までに読み書きの「準備」ができているという段階にまで、文字と音の認識力を高めることだと考える。先行研究において、読み書きには音韻認識と文字と音の対応の知識が必要である（深川，2022）と述べている。そこで。保育機関では遊びの中で習得するとされている音韻認識や文字と音の対応に対して、本研究では教育的介入を行った。介入方法は、日本の保育機関に在園している外国につながる就学前児童に対して①文字なし音声指導②文字あり音声指導を週 1 回 1 時間計 10 回行った。その結果、音声指導全般に効果が認められ、特に文字あり指導がより有効であった。これらのことから、「指導」による就学前の読み書きの準備を行うことの必要性が示唆された。

（杉山―静岡文化芸術大学大学院生）

〔2024 年度第 4 回支部集会（関西支部）口頭発表 C-2〕

住民関係を構築する日本語教室の試み

―神奈川県 N 団地の事例から―

片山奈緒美

神奈川県市の大規模団地の N 団地は、近年外国人住民の増加により多様な課題を抱えていた。今春、管理会社の主導で団地内の日本語教室が開設された。日本語教室で参与観察を行ったところ、日本語教室が単なる学習の場や外国人住民の居場所といった従来の機能を超えて団地内外の住民や行政、地域の公立学校などともつながりを持つ多文化共生社会を目指す地域のハブ的存在になっていることが観察された。教室が果たした役割と短期間で成果を得られた理由について分析する。

（片山―東洋大学）

〔2024 年度第 4 回支部集会（関西支部）ポスター発表①〕

言語ヒストリー研究は、セルフスタディと言えるのか

―日本語教師による日本語教師研究と日本語教師教育者の専門性開発のために―

小林浩明・上田和子・和泉元千春・野畑理佳

本発表は，日本語教師による日本語教師研究として開発された言語ヒストリー（LH）（上田ほか 2022）が日本語教師教育者の専門性を開発するために資するかどうか，教師教育分野で定評のあるセルフスタディ（SS）（齋藤ほか 2024）の視座から，その可能性を論じるものである。LH と SS は、研究者が自己を対象とする研究であり，クリティカルな批評を担う共同研究者が必要不可欠である点で共通する。LH は、「ことばをめぐる経験」に焦点を当てて，日本語教師の内的キャリアを探求するため，SS のように直接実践の改善を目指してはいないが，日本語教師が「ことばをめぐる自己」に対する理解を深めることは、間接的に実践の改善に繋がることが期待される。実践と理論，すなわち，教師の成長と研究を切り離すことなく，同時に行える方法であれば，SS と言える可能が十分にあるだろう。

（小林―北九州市立大学，上田―武庫川女子大学，和泉元―奈良教育大学，野畑―武庫川女子大学）

〔2024 年度第 4 回支部集会（関西支部）ポスター発表②〕

日本語学習者の聴解過程における聴解ストラテジーの使用

阪上彩子

本研究の目的は，未知語を「モニター」し，「推測」するストラテジーと，その未知語の意味について「確認」するストラテジーをとりあげ，聞くことが得意な日本語学習者とそうでない学習者がそれぞれ聴解過程において，どのようにそれらのストラテジーを用いるかを明らかにし，ストラテジーの判断基準を明示することである。

調査に使用するデータは「日本語非母語話者の聴解コーパス」のデータ 3 件（公開中 1 件，公開予定 2 件）である。哲学の模擬講義を視聴し，思考発話法によるデータを使用する。

調査の結果から，聞くことが得意な学習者とそうでない学習者の違いは，先行研究で述べられていたとおり，「広範囲モニター」のストラテジーを用い，「推測」から「確認」へと連鎖している。さらに，「広範囲モニター」については，未知語が段落を超えて出てきた際にも同じ語だと照合できれば，「広範囲モニター」を用いているといえる。

（阪上―奈良教育大学）

〔2024 年度第 4 回支部集会（関西支部）ポスター発表③〕

大学で教える日本語教師を対象とした研修事例

―教師の学びを促進する共同体を目指して―

谷津裕子・齋藤和恵

多様化の進む社会において，教師個人の研鑽に留まらず，幅広い教育観や指導法に触れることは有用であり，所属する共同体においても学びを促す組織化が求められている。本研究では，2023 年度に所属機関で行われた FD 研修参加者を対象にアンケートと事後インタビューを実施し，研修の効果及び改善点を探ると共に，共同体としてどのような取り組みが求められているのかを検討した。アンケートの結果からアイデアの共有が役立ったと答えた教師が多かったが，協働活動への評価は否定的な回答も約半数見られた。要因として，多角的な視点で意見交換するための十分な時間が確保できなかったという指摘があったことから，時間の限られた FD 研修という場にこだわらず，まずは日常的に各々が問題意識を共有できる場を設けることが必要だと考える。言語化や振り返りの機会が増えることで現場の状況が明確化され，教員が共に学べる共同体に近づくことが期待できる。

（谷津，齋藤―東京国際大学）

〔2024 年度第 4 回支部集会（関西支部）ポスター発表④〕

地域日本語教室の引き継ぎと継続を可能とする行政職員の意識

―インタビュー調査に基づく事例研究―

深田絵里・髙橋志野

本研究は，新規に立ち上げた地域日本語教室の運営を引き継ぎ，継続的に関与している行政職員の意識形成を明らかにすることで，持続可能な地域日本語教育の実現を目的とする。地域日本語教室は多文化共生を推進する重要な役割を担っているが，その運営はボランティアや行政職員の熱意に依存しており，特に行政職員の人事異動による引き継ぎの難しさが課題である。そこで，教室立ち上げ後，円滑に業務を引き継ぎ，積極的に関与している A 氏にインタビュー調査を行い，その意識がどのように形成されていったか分析した。その結果，システムコーディネーターの 4 つの資質・能力（日本語教育学会 2011）のうち，特に「“その地域社会”を理解し，生きる力」と思われる要素が認められた。また，前任者からの丁寧な引き継ぎやサポートがあったことと，外部で報告する機会があり活動を言語化することで，教室運営への積極的な意識が形成されていったことが明らかとなった。

（深田，髙橋―愛媛大学）

〔2024 年度第 4 回支部集会（関西支部）ポスター発表⑤〕

物語を読解後にマンガを描く授業実践

―読みによる理解を非言語で表現することの意義に着目して―

嶋田　由唯

本発表は，多様な言語文化背景を持つ留学生が集まる国内の日本語クラスで物語文を読解する際，学習者が絵（マンガ）を描くという活動を取り入れた実践の報告である。「日本語の物語を生き生きとイメージし楽しむ」ことを目標とし，教室を「日本語の文章を媒介としたコミュニティ」と捉えた。学習者は物語文を読んで 1 コマのマンガを描き，クラスで 1 つのストーリーを完成させ共有した。結果，学習者の絵には個人の多様な社会文化背景や能力を反映した心内表象が表現された。また絵を通じた相互行為により読みが深まる学び合いが見られた。教師は絵や相互行為の観察から読みの技術や知識といった能力だけでなく，各自が持つさまざまなリソースや能力に接した。絵（マンガ）という非言語表現を媒介とすることで「ビジュアル・ナラティヴ」の効果を日本語教育に応用し，「第二言語リテラシー」を活かし認め合う教室活動が行える可能性が示唆された。

（嶋田―立命館大学大学院生）

〔2024 年度第 4 回支部集会（関西支部）ポスター発表⑥〕

日本語を共通語とした説明活動が日本語学習者と日本人学生に与える影響

伊藤　賀与子

本研究では，筆者が担当した国際共修の授業における受講者が日本語を共通語とした説明活動を行った上で，質問紙調査，授業の課題として提出を課した振り返りレポートのデータを用い，学生が説明活動によってどのような学びを得て，どのように変容していったのかについて分析・考察した。また，そのような変容を実際の授業内でどのように経験したのかについても考察した。

質問紙調査では，授業内でのグループ内での説明活動について「非常に当てはまる」～「全く当てはまらない」もしくは「非常にそう思う」～「全くそう思わない」の 5 尺度を用いて尋ね，受講者全体の説明活動における意識と行動の変化に関する成果・状況があきらかになった。授業開始時には，日本人学生，留学生ともに多くの受講生が「語学力の向上」を達成したい学習成果として挙げていたが，授業終了時には，「語学力の向上」ではなく，主に，留学生は「わかりやすい日本語で説明できること」，日本人学生は「相手の説明を正しく理解できること」を学習成果としてとらえるようになったことがわかった。

質問紙調査の中で受講者が「説明活動の中で難易度が高かった」と回答した項目と，「得られた学習成果」の相関関係について調べた。その結果，受講者が難易度が高かったと感じた項目を学習成果に高い相関性があることが明らかになった。

（伊藤―広島修道大学）

〔2024 年度第 4 回支部集会（関西支部）ポスター発表⑦〕

タスク遂行時におけるプランニングの種類が言語への焦点化に及ぼす影響

―ジグソータスクを題材として―

大野芽生

本研究は，タスク・ベースの日本語指導を行う際に，教師によるプランニングのタイミングの操作を効果的な学習につなげる方法を明らかにすることを目的とする。プランニングには遂行前に行う PTP と遂行中に行う OLP の 2 種類があり，第二言語の習得を促すのに有効な FonF との関わりが注目されている。これまでプランニングの操作が発話内容の質や言語への焦点化に影響することが明らかにされ，本研究では，ジグソータスクを用いてプランニングのタイミングが発話に及ぼす影響を調査した。

PTP 群と OLP 群で，タスクの達成度，言語への焦点化の頻度や言語形式がどう異なるかを調査した結果，タイミングにかかわらず，インターアクションが積極的に行われた。また，PTP 群より OLP 群で文法項目に関する LRE が見られ，教師によるタスク遂行中の声かけが学習者の文法項目への焦点化を効果的に促進することが示唆された。

（大野―広島大学大学院生）